仏語圏言語文化研究の
過去・現在・未来

小　松　祐　子

お茶の水女子大学仏語圏言語文化コースは、東京女子師範学校開学（1875年）から101年後の1976年4月に「文教育学部文学科仏文学仏語講座」として創設されました[1)]。師範学校以来の伝統をもつ講座（国文学、中国文学、英文学）に加え、新たにフランス文学の講座が設置されたことは画期的なことであったものと思われます。サルトルやボーヴォワールが活躍し世界中でフランス文学や文化が燦然たる輝きを放っていた時代、日本においても大江健三郎をはじめ文学者たちは仏文学を修め、大学のなかで仏文が花形学科だった時代のことです。本学においても、中川信先生、石川宏先生、中村弓子先生、シャンタル滝野先生の4名の教師陣による充実したフランス文学の専門教育が開始されました。1980年3月の初めての仏文卒業生は6名、その後は学生数が増え、2021年3月までに計403人の卒業生を輩出しています。

現在本コースは、全学コア・フランス語、文教育学部言語文化学科仏語圏言語文化プログラム、人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻博士前期課程（英語圏・仏語圏言語文化学コース仏語圏言語文化専修）、同博士後期課程（言語文化論領域）の教育を担っています。2020年度のコース所属学生は学部2-4年生が36名、大学院生3名に上り、アカデミック・アシスタント2名、教員4名（うち1名はドイツ語圏専門）がコース運営に当たっています。学内でもっとも小さなコースの一つですが、少人数ゆえのアットホームであたたかな雰囲気ときめ細かな指導体制を特徴としています。ドイツ語圏研究との連携も本コースの特徴の一つであり、卒業論文で独仏比較を扱う学生が出てきています。

コース創設50周年（2026年）まで5年のカウントダウンに入るこの時期に、コース内に「仏語圏言語文化学会」を立ち上げ、研究誌『仏語圏言語文化』を創刊することができましたことを大変うれしく思います。本創刊号には、研究論文3本、卒業論文抄録5本を収めることができました。これらは

学生と教員が仏語圏（独語圏）言語文化の研究に日々研鑽を重ねてきた成果の一部です。本コースの学生は、狭義の言語文化に限らず、芸術、音楽、映画や社会問題、国際関係にまで広く関心をもち、研究を行っています。さまざまな分野の非常勤講師の先生方に授業をご担当いただいていることも、学生の世界を広げることに寄与しています。45 年間の蓄積のうえに現在があることも忘れてはなりません。本コースの専門教育にこれまでご尽力ご協力くださったすべての皆様に感謝を申し上げたいと思います。

この半世紀のあいだに、大学を取り巻く社会の環境は大きく変わりました。情報化やグローバル化が急速に進行し、少子化も深刻さを増しています。1991 年大学設置基準の大綱化、2004 年国立大学法人化といった大きな改革が実行されてきました。成果主義が叫ばれ、人文系研究に対する風当たりが厳しい情勢が続いています。本コースも、その存続が危ぶまれる時期があったと聞いております。存続のためにご努力くださった先生方とご理解ご支援をくださった本学執行部に深く感謝をいたします。

フランスの文学や文化がかつてもっていた威光は薄れたと言われる昨今ですが、フランス語圏の言語や文化に魅力を見出す若者が今も後を絶たないことは事実です。私自身、フランス語との付き合いは早数十年になりますが、日々新しい発見があり、興味はつきません。フランス語とその文化について、50 年前と今とでは、人々の関心の対象やあり方が変わってきているのではないでしょうか。フランス文学や文化の威光は「薄れた」のではなく「相対化された」と考えるべきでしょう。

まず言語による文化活動としての文学が、映像やマルチメディアといった新たな表現手段の普及と発達により、その影響力を弱めたことは否定できないと思われます。かつて（私が本学学生だったころ）本コースの学生はフランス文学についての卒業論文を書くのが当たり前でした。しかし、今日の学生の関心は多領域にわたり、料理、ファッションから漫画、舞踊にいたるまで、あらゆる文化事象に果敢にまた貪欲に取り組んでいます。

また過去には文化的影響力によってフランスが他を圧倒し、フランス以外のフランス語圏が目を引くことはありませんでした。「フランス語」と言えば「フランス」だったのです。私の学生時代には、フランス以外のフランス語圏について学ぶ機会はまったくといってよいほどありませんでした。しかし今日、たとえばフランス語の初級教科書においてもすでに、世界中のフランス語圏が紹介されています。フランス語話者は世界各地で約 3 億人に上り、

それぞれの地域に豊かで多様なフランス語の歴史と文化が存在することが知られるようになってきました。文学においても、ケベック、カリブ海地域、アフリカの作家たちの作品が近年続々と日本で翻訳され､紹介されています。

さらに学術研究の方法にも変化が見られます。伝統的ディシプリンの重要性は否定すべくもありませんが、分野横断的、学際的アプローチによる研究の発展が著しい昨今です。フランス語圏の言語文化についても、社会学、歴史学、人類学、心理学、教育学など、さまざまな専門分野の知見を活かし、多角的視野でとらえ、統合的に検討することによって、新たな価値を生み出すことが期待されています。

このような変化に本コースの教育と研究は柔軟に対応してきましたし、今後も多いに発展の可能性があることを信じています。フランス語圏の言語文化は、歴史的奥行きと地理的広がりとによる豊かな多様性をもつ魅力的な研究対象です。フランス語圏世界、つまりフランコフォニーの言語文化を研究すること、また日本や他の言語圏の文化と比較考察することは、グローバル化が進む 21 世紀の複雑で多様な文化的諸問題に対処するための手がかりを与えてくれるでしょう。日本の人文科学研究の活性化と発展にも貢献できるのではないでしょうか。仏語圏言語文化研究の魅力と可能性を活かしていくことが本コースの使命であると考えます。

この 1 年間は、新型感染症感染拡大により学生も教員も慣れないオンライン生活を強いられ、対面できた回数は数えるほどでした。学生の短期・長期留学も教員の海外出張もすべて中止となりました。しかし、困難のなかでも皆の努力により学習や研究の質を落とすことなく、各授業の期末課題はもとより、卒業論文、修士論文に成果を結実させ、研究誌刊行にまでいたりましたことに深い安堵と満足を覚えます。

創刊の喜びとともに、これからの継続に向けて、身が引き締まる思いがいたします。この一歩をさらに次の一歩へとつなぎ、本研究誌を多様な言語文化研究の安定した発信の場とできますよう、努力を重ねてまいります。読者の皆様からのご感想、ご批判、ご支援をお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

注

1）『お茶の水女子大学百年史』、「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会、1984 年、552-553 頁。